

# 自閉症スペクトラムの学齢児に対する心理的活動拠点づくりへの支援

Psychological support for school-age children with autism spectrum disorder: Community oriented social skills training program

日戸 由刈<sup>1)</sup>

Nitto Yukari

## 1. はじめに

自閉症スペクトラム (Autistic Spectrum ; AS) の人たちへの発達支援とは、何をすべきであろうか。ASの人たちは、全体的統合の不全やマインドリーディングの困難さなど定型発達の人たちと異なる特有の心理機能を持つことが知られている<sup>1)</sup>。そして彼らの持つ独特な精神構造は、あたかもフラクタル図形のように同形性をもって発達していく可能性が、長期追跡調査の結果から示唆されている<sup>2)</sup>。

ASの人たちへの発達支援では、円滑な社会生活を促進するための支援と並行して、特有の心理機能を持ったまま、人と一緒に活動してエネルギー注入のできる特別な居場所、すなわち“心理的活動拠点”を地域の中につくるための支援ができれば、理想的である<sup>3)</sup>。「心理的活動拠点が、円滑な社会生活を下支えする」という構造があつてこそ、真のインクルージョンが実現すると考えられる (図1)。

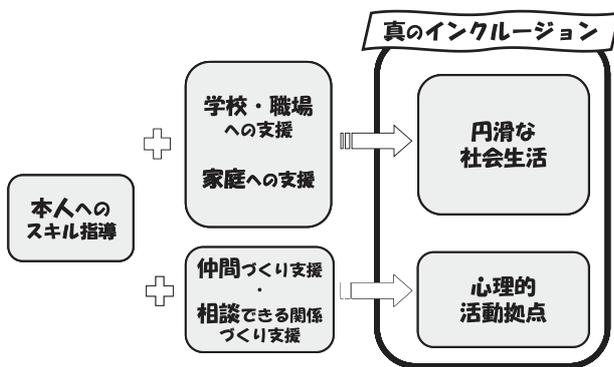


図1 自閉症スペクトラムの人たちへの発達支援

1) 横浜市総合リハビリテーションセンター  
発達支援部 療育課

ASの人たちが人間関係を築くための支援は、決して容易なことではない。横浜市総合リハビリテーションセンター (YRC) における、ASの学齢児に対する心理的活動拠点づくりへの支援の実践を報告する。

## 2. 心理的活動拠点づくりへの支援の実践

YRC発達精神科では、早期支援<sup>4)</sup>を終了した発達障害の学齢児を対象に、COSSTプログラム群 (Community Oriented Social Skills Training ; コミュニティでの心理的活動拠点づくりに向けたSST) を開発している<sup>4)</sup>。

COSSTプログラム群は、2つの段階で構成される (図2)。第1段階は、診療所の中で行う社会性の基本学習プログラムであり、心理的活動拠点の土台づくりに丁寧に取り組む。土台づくりでは、本人のスキル指導はもちろん、親の認識に働きかけることに重点を置く。親は、本人にとって最も身近なサポーターになり得ると考えるからである。第2段階は、診療所の外のコミュニティと隣接する場所で行う余暇活動支援であり、子ども同士の余暇活動が心

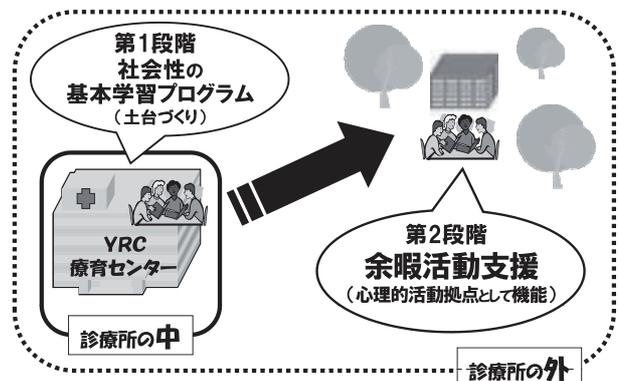


図2 COSSTプログラム群の構造

理的活動拠点として機能するための支援に、重点が移行する。

## 2. 1 社会性の基本学習プログラム

社会性の基本学習プログラムには、ライフステージに沿って2つの教室が用意されている。小学校低学年向けの『やってみよう！の教室』と、小学校高学年以上向けの『社会性とマナーの教室』である。

### (1) 『やってみよう！の教室』

小学校低学年向けの『やってみよう！の教室』は、3回の集団療育と親子一緒に家庭で取り組む工作やお手伝いなどの「宿題」で構成される。ねらいは、子どもが構造化された場面で人と一緒に楽しむ経験を持つこと、親が自閉症の特性を理解し歩み寄り姿勢を持つことである。

集団療育のスケジュールは、子どもの活動と親支援を連動させている(図3)。前半の活動では、家庭で親子一緒に取り組んだ宿題を子どもが発表し、他のメンバーから肯定的な注目を得ることで、次の宿題に向けた動機づけを促す。後半の活動では、子ども同士の仲間づきあいを親が観察する。子どもの自由遊び中に、親同士でのふりかえりを行う。

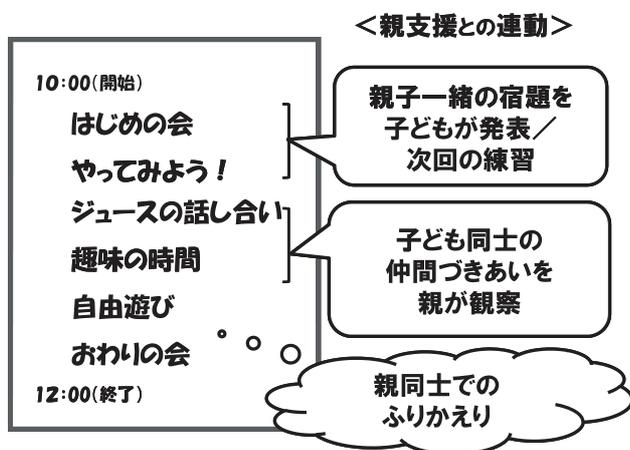


図3 『やってみよう！の教室』

ASの子どもを育てる親に対して、“子どもへの歩み寄り”を促すことは、意外と難しい課題かもしれない。親が子どもに寄せる期待や希望が強まり、一方的な関係が蓄積されやすいかもしれない(図4)。親に子どもへの歩み寄りを促すために、『やってみよう！の教室』の親支援では3つの工夫を行っている。

1つ目は、子どもの内面がわかりづらいからこそ、

親の体感やふりかえりを促す工夫である。家庭で親子一緒に取り組む宿題を通して、親は子どもの不安や意欲、興味の持ち方を体感し、「ふりかえりシート」に記入する。教室でのふりかえりの時間には、親同士でシートを用いて感じたことを共有する。

2つ目は、子どもの主体性を見落としがちだからこそ、子ども自身への動機づけを入念に行うことの大切さを親に伝える工夫である。親が子どもへの動機づけの基本を学ぶために、日程や活動内容をわかりやすく示した「しおり」を、教室に来る前に親子で一緒に見ることを宿題のひとつにしている。教室の中で子ども自身が対等な仲間関係を体験することも、子どもの動機づけにとって大切であると、心理士は親に説明する。

3つ目は、子どもが通常の集団に所属するからこそ、子どもの特性に配慮したサポートの必要性を、親が実感できるための工夫である。教室では、自閉症の特性に配慮したシンプルでわかりやすい活動が行われる。子どもが自分で判断し、自律的に行動する姿を見ることは、親がサポートの必要性を実感することにつながると考えられる。

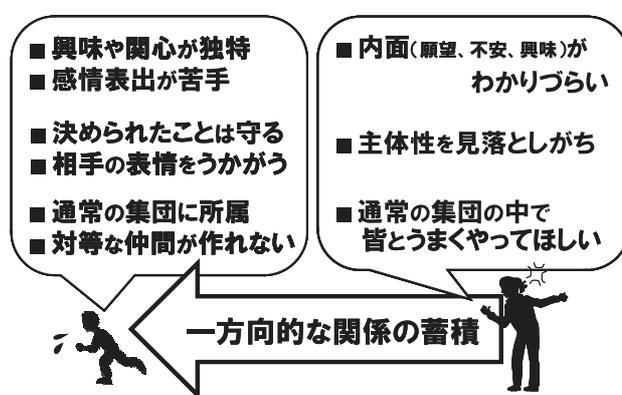


図4 自閉症スペクトラムによるみる親子関係

### (2) 『社会性とマナーの教室』

小学校高学年以上向けの『社会性とマナーの教室』<sup>4)</sup>では、開始前に行う子ども本人へのオリエンテーションを大切にしている。教室のメンバーは、年齢や性別、興味の持ち方に配慮してグルーピングする。メンバーの共通項や教室のスケジュールについて視覚的教材を用いた説明を受け、子ども本人が「参加してみよう！」と思えることが肝要である。

『社会性とマナーの教室』は、5回の集団療育(図5)と、親のモニター参観および保護者教室で構成される。ねらいは、子どもが対等な仲間関係を通じて、合意することを学ぶこと、親が地域での子ども同士の集いをサポートする心がまえを持つことである。

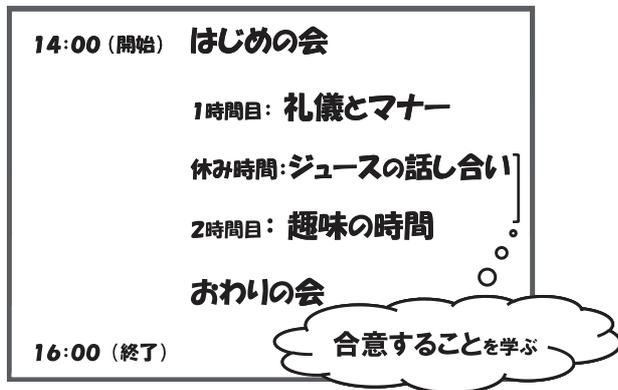


図5 『社会性とマナーの教室』

子どもが合意することを学ぶための指導はまず、集団療育の休み時間に、子ども同士で分け合って飲むジュースを決める『ジュースの話し合い』<sup>5)</sup>を通じて行う。この指導は、子ども同士で協力してテーブル運び、話し合いの場を設定することから始める。話し合いは「話し合いボード」やシナリオなどの視覚的教材を使って、司会役の子どもが進行する。気をつけることは、「みんなの意見を聞く」、「意見が通らなかった人に、ひと声かける」であることも、視覚的教材で確認し合う(図6)。こうして、協力し合うことが必要とされ、誰もがルールを理解できる暗黙の了解を排した設定によって、対等な仲間関係や合意を体験することが可能となる。



図6 『ジュースの話し合い』

つぎに、子どもたちが自分の興味のグッズを持ち寄り、交代でメンバーに見せる『趣味の時間』<sup>7)</sup>が、スケジュールのひとつとして用意されている。この時間では、初めに「話をする人」と「話を聞く人」が存在するという、会話の基本構造を教える。気をつけることは、「知っている話でもつきあう」「タイマーが鳴ったら交代、ただしきりのよいところ」である(図7)。話をするのも話を聞くのも、相手があってこそで、“お互い様”であることを明文化するのである。これら“仲間づきあいの型”の習得により、ASの子どもたちが、対等な仲間関係や合意の体験を蓄積し、自分たちで地域での集いを行うことが、大いに促進される。

地域での集いが実現するためには、親同士のサポートが欠かせない。集団療育のモニター参観では、子ども同士が「また会いたい!」と盛りあがる様子を、心理士と親が共有する。保護者教室では、親同士が話し合い、地域での集いを企画できるように、心理士が具体的な方法を助言する。



図7 『趣味の時間』

## 2.2 余暇活動支援

COSSTプログラム群開始以降、これまでの7年間に社会性の基本学習プログラムを利用した親子100組のうち、プログラムの場で「また会いたい!」と希望した子どもは100名全員で、プログラム終了後、地域で一度でも集った子どもは100名中60名であった。3年後の仲間づきあいの継続状況を調べたところ、いずれかの形で余暇活動支援を利用した36名では24名(67%)が継続していたが、余暇活動支援を利用しなかった24名では4名(17%)し

か継続していなかった。仲間づきあいがコミュニティの中で定着するために、余暇活動支援は極めて有効であることが示唆された<sup>7)</sup>。

YRC発達精神科では、余暇活動支援をさまざまなバリエーションで展開している。他施設の余暇教室をバックアップする形では、隣接する障害者スポーツ文化センターと『女の子のためのジュニアダンス教室』を共催している。親主導の余暇活動をバックアップする形では、『自主活動サポートプログラム』を行っている<sup>10)</sup>。発達精神科の心理士が余暇活動の場を主催する形では、『鉄道イベント』<sup>4) 6)</sup>や『芸術まつり』<sup>3)</sup>などのイベント・プログラムを行っている。2012年度のイベント・プログラムの参加者数は、『鉄道イベント』が121名、『芸術まつり』が出品者34名、観覧者約450名であった。

### 3. おわりに

本報告では、幼児期や学齢期から専門機関を利用したASの人たちに対する、早期からの心理的活動拠点づくりへの支援の実践を紹介した。これらのプログラムが一定の効果を発揮するためには、少なくとも小学校期までに専門機関を受診し、ソーシャルワーカーのインテーク面接や専門医の診察などを通じた初期のアセスメントとオリエンテーションが機能している必要がある。このプロセスで子どもに何らかの精神症状が認められた場合、あるいは親が合意に至らない場合は、本プログラムへの参加を促すことは、かえって親子それぞれの苦痛や不安を増悪させる結果となりかねない。本プログラムの導入には、医療チームの包括的なアプローチに基づく判断が欠かせない。

一方、YRC発達精神科を受診する人たちの中には、中学生になって初めて専門機関を利用する場合や、幼児期や学齢期に専門機関をいったんは受診したが本人や家族の利用希望が続かず終了となった場合も少なくない。あらゆるケースに対応するためには、支援技法の中に人間関係の密度が異なるバリエーションを用意する必要がある。たとえば、個別の面接を重ねて本人と心理士の関係が築ければ、『芸術まつり』のような、侵襲性の少ない“ゆるやかなネットワーク活動”型のイベント・プログラム

につなげることも可能となる<sup>8)</sup>。

最後に、ASの人たちへの発達支援では、円滑な社会生活を促進するための支援に比べて、地域の中に心理的活動拠点をつくるための支援は、若干後回しにされてきたように感じられる。2012年に児童福祉法が改正され、放課後等デイサービスの創設が謳われている。発達障害の人たちの居場所づくりを推進する動きは、今後活発になると予測される。居場所が“心理的活動拠点”となるためには、導入段階での土台づくりが肝要であることを、最後にもういちど強調したい。

〔第53回日本児童青年精神医学会総会

(2012年10月31日～11月2日、東京都)にて発表〕

### 参考文献

- 1) Frith, U : Autism: Explaining the Enigma: Second Edition. Blackwell Ltd., Oxford., 2003. (富田真紀、清水康夫、鈴木玲子訳：新訂自閉症の謎を解き明かす。東京書籍、2009.)
- 2) 本田秀夫：自閉症スペクトラムが精神病理学および治療学に及ぼす影響。臨床精神病理33：66-71, 2012.
- 3) 長嶺麻香、日戸由刈、山口朋子、他：学齢期から成人期の自閉症スペクトラム障害の人たちに対する「芸術まつり」プログラム—自己有能感を促進する、新たなカウンセリング技法—。リハビリテーション研究紀要22, 2013.
- 4) 日戸由刈、清水康夫、本田秀夫、他：アスペルガー症候群のCOSSTプログラム—破綻予防と適応促進のコミュニティ・ケア—。臨床精神医学 34：1207-1216, 2005.
- 5) 日戸由刈、萬木はるか、武部正明、他：4つのジュースからどれを選ぶ？—アスペルガー症候群の学齢児に集団で「合意する」ことを教えるプログラム開発—。精神科治療学24：493 - 501, 2009.
- 6) 日戸由刈：アスペルガー症候群の人たちへの余暇活動支援—社会参加に向けた基盤づくりとして—。精神科治療学 24：1269-1275, 2009.
- 7) 日戸由刈、萬木はるか、武部正明、他：アスペ

ルガー症候群の学齡児に対する社会参加支援の新しい方略—共通の興味を媒介とした本人同士の仲間関係形成と親のサポート体制づくり—, 精神医学52(11): 1049-1056, 2010.

- 8) 日戸由刈、平野亜紀、長嶺麻香、他：中学生・高校生になって発達精神科を受診した自閉症スペクトラム障害の人たちに対する心理士からの支援のあり方—本人に主体的な相談を促すオリエンテーション技術の開発—, リハビリテーション研究紀要22, 2013.
- 9) 清水康夫：横浜市総合リハビリテーションセンターにおける早期介入システム, (清水康夫、本田秀夫編：幼児期の理解と支援<石井哲夫監修：発達障害の臨床的理解と支援2>) 金子書房、pp.243-260, 2012.
- 10) 山口朋子、日戸由刈、武部正明、他：自閉症スペクトラム障害の人たちに対する「自主活動サポートプログラム」の試み—仲間関係の維持に向けた保護者のサポート体制づくり—, リハビリテーション研究紀要23, 2014.